様式２

平 成 ３ ０ 年 度　自 己 評 価 表

鳥取県立琴の浦高等特別支援学校

中長期目標（学校ビジョン）	○社会の中で自立して生活ができる力の育成 ○職業生活に必要な意欲と能力の育成 ○豊かな人間性、たくましく生きるための心と体の育成

今年度の重点目標	
	1　社会人としての基礎的な力の育成
	2　職業生活に必要な力の育成
	3　地域で生きる力の育成
	4　教職員の専門性・授業力の向上
	5　組織力の向上

年度当初					評価結果（最終）		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1　社会人としての基礎的な力の育成	よりよい生活習慣の徹底（○学年部、指導部、保健部）	○昨年度、目標に挙げ取り組んだが、年度末アンケートで１日を通じて元気よく挨拶ができたと回答した生徒が４４％であった。	○８割の生徒が気持ちの良い挨拶（場にあった挨拶）をすることができる。	○ビジネスマナー講座、進路指導部の講話の実施により意識付けを図る。 ○生徒会、教職員による挨拶運動を実施する。	○講座・講話、挨拶運動や生徒会での挨拶調べ、生徒アンケートによる挨拶の自己評価と目標立て等実施した。 ○生徒アンケートでは７５％良い、企業アンケートでも７５％良いとの評価であった。しかし、自己評価では元気良い挨拶ができると答えた生徒は３７％という結果であった。 ○場にあった挨拶では、特に実習中や専門の授業では意識して取り組めている。	B	○教職員の共通した意識改革 ○挨拶ができる学校にするための生徒会による仕組みを作る。 （あいさつMVP的な表彰の実施） ○外部講師によるビジネスマナーの実施 ○目に見える評価を生徒に返す取り組み
	人との良い関係性や社会性を育む指導（○学年部、支援部）	○人との関係性がうまく結べない生徒がいる。 ○自尊感情が低く自分に自信がなかったり、困ったことを相談することができない生徒がいる。	○８割の生徒が、学校生活が充実している・仲間との人間関係が楽しいと感じている。	○教育相談の場を設定する。 ○スクールカウンセラーと連携して支援を行う。 ○生徒情報データーベース等で生徒の情報や支援について共通理解を図る。 ○人間関係づくりを意識した活動を行う。	○生徒アンケートでの学校生活満足度は７９％、学校生活が楽しいは８６％であった。 ○生徒情報共有・教育相談・カウンセリング等により教職員の早期発見早期対応ができた。 ○今年度は特に携帯でのトラブルが多発し、いじめの問題に発展することが多かった。 ○難しいケースは外部機関につなぎ専門的な助言を受けながら指導支援を行った。	B	○携帯トラブルが今後とも起こることを意識し、入学者説明会や４月当初から徹底した情報モラル指導を行う。 ○家庭と連携し携帯電話の家庭ルールを決め守るよう懇談等でも確認していく。 ○自分の考えを伝えるトレーニングを取り入れ、コミュニケーション能力を育てる。
	自治活動（生徒会活動、寄宿舎自治活動、チューター制度等）の推進（○指導部、寮務部）	○生徒会活動や学校行事において司会や進行等、年間を通じて生徒が活躍する場面が増えつつある。 ○寄宿舎では、舎生が自治活動の手順について理解し、生活をよりよくするための話し合いも活発になってきている。	○生徒会活動で、生徒が主体的に活動や行事の企画運営に関わることができる。 ○自治会行事の運営を指導員と連携を取りながら生徒主体でできる。	○見通しを持って活動できるように事前の話し合いや準備の時間を確保し計画的に行う。 ○活動の目的や課題を確認し合う機会を設定する。 ○自治会役員、部屋長等が行事や運営の計画、実践を繰り返し行う。	○行事の企画運営において事前の打合せや準備の時間を確保したことで、生徒が見通しを持って意欲的に取り組むことができた。また、学校生活の課題について考える機会を持ったことで、より主体的に取り組もうとする姿も見えてきた。 ○自治会役員や行事の実行委員が中心となって、企画や運営、舎生への呼びかけ等をすることができた。	B	○取組への評価を適切に行い意欲につなげるため定期的な執行部会を月一回設定する。 ○生徒主体の自治活動となるよう、意見の出し方や会の進め方等に取り組む。 ○来年度以降も舎生が担える部分を増やし、より主体的な活動ができるよう支援をしていく。
2　職業生活に必要な力の育成	働く心構え、働く意欲の指導（○進路部、学科部、学年部）	○現場実習で働く意欲が乏しいと評価される生徒が見られた。 ○働く心構えが不十分なままに就職してしまう生徒がある。 ○企業調査により専門的な技能を求める企業は少なく「働く意欲」等を求めている。	○生徒一人一人が、学年別の目標を理解し、実習への意欲が向上している。	○心の道場、連続ミニセミナー、成果発表会等を計画的に実施するとともに、振り返り等で意欲を引き出す。 ○進路に関する学習の導入段階や学年集会等で卒業生の話を紹介する。	○心の道場を計画通り実施し、２年生の実習評価で挨拶の評価が上がった。 ○連続ミニセミナー、成果発表会を計画通り実施し、生徒それぞれが自分を振り返り、次の意欲につながった。 ○卒業生の状況を実習事前指導時に話したり、進路ミニ研修や通信「卒業生に学ぶ」で紹介したりした。	B	○成果が見られたので、今後とも継続実施する。
	専門教科共通目標の徹底（○学科部）	○専門共通目標があることは認識しているが、その項目について具体的に理解している生徒はまだ多くない。	○生徒一人一人が、学年別の共通目標を具体的に理解し、実践できている。	○各専門教科での始業時や終了時の復唱や振り返り等で繰り返し強調し、指導する。 ○コース学習終了時に共通振り返りシートを活用する。	○始業時及び終了時の復唱・振り返りで繰り返し指導し、おおよその生徒が具体的に理解した。特に上級の学年ほど理解が進んでいる。 ○コース終了時にシートに記入することで到達度を理解する生徒は多くいた。	B	○反復指導に加えて、教室に簡潔な言葉で掲示するなど視覚でもアピールする。 ○記入することが多く難しいと思う生徒もいるので、もっとシンプルなシートにする。
	専門的な職業スキルの指導（○学科部、進路部）	○選択したコースと異なる業種を進路先として選ぶことは少なくない。 ○校外検定受検や校内検定作成が遅れているコースもある。	○コース間の連携によって就職までに、必要とするスキルを学ぶ機会を作れている。 ○全コースが検定を作成し、実施している。	○コース間の派遣制度の確立を図る。（ルールの作成） ○検定未実施のコースに働きかけ、校内検定を作成する。	○派遣制度のルールを作ったことでスムーズに他コースでの学習が行えた。 ○検定未実施のコースが独自の校内検定を作り実施した。	A	○派遣制度は効果があったので継続する。 ○校内検定を今後も実施するように働きかけを継続する。
3　地域で生きる力の育成	地域連携事業の推進（○学科部、進路部）	○積極的に近隣の施設等に出向いて、地域密着型の職業教育を実践している。しかし、年度によって活動の有無があるなど不安定なコースもある。また、施設担当者から評価していただくことはなく、指導していただくだけの機会となっている。	○毎年、地域密着型の活動を計画、実施する。 ○外部の方から評価をいただくことで、地域や社会に求められる人材育成につなげる。	○地域密着型職業教育として、施設や事業所での活動を年間計画の中に位置づける。 ○校外での学習の際は、専門共通目標について施設担当者に評価していただき生徒に還元する。	○各コースが年間計画に位置付けて、継続的な活動が実施される目途がたった。 ○一部施設において、共通目標について評価してもらうことができた。	A	○継続的に地域密着型の活動ができるように地域施設等との連携を密にする。 ○外部の方に負担がかからないように簡素化した評価表を作成し、外部からの評価を促進する。
	生涯体育、文化・芸術活動の推進（○指導部）	○部活動において、計画的に活動し各種大会や地域のイベントへの参加も増えてきつつある。	○各種大会や地域のイベントに積極的に参加している	○各種大会や地域イベントの情報を早めに生徒に伝えるとともに、練習を計画的に行う。	○活動の計画性においては不十分な点もあったが、各部が大会や地域イベントや他校との交流試合に積極的に参加し、ダンス部の手話パフォーマンス甲子園への出場等、新しいことへの挑戦も行った。	A	○引き続き各種大会やイベント、交流への参加を積極的に行い生涯活動に繋げていくとともに、生徒自身が見通しをもって活動できるよう計画的に取り組む。
4　教職員の専門性・授業力の向上	授業研究会の実施（○研究研修推進）	○第２回琴の浦教育検証プロジェクトの結果より、企業が求める力として、昨年度より専門教科で取り組んでいる共通目標の指導の継続が必要であることがわかった。	○本校職員が専門教科で４つの共通目標について効果的な指導を行い、企業からの生徒の評価が向上する。 ○９割の職員が授業を参観し、かつアンケートを提出する。	○共通目標を視点に掲げた専門教科の授業公開を行う。 ○エキスパート教員による授業公開を行う。	○共通目標に視点にあてた専門教科の授業公開を２回実施した。また、参観シートを作成し、同様の視点で授業を参観できるようにしたが、出張等と重る等のため参観者が少なくなってしまった。 ○自立活動、専門教科においてエキスパートの授業を参観シートを作成して公開したが、職員の授業と重なったため参観者が少なくなってしまった。参観者の参観シート提出は全員なされていた。	C	○経年研修等様々な機会を捉え、授業公開できる日を職員へ啓発することで、必ず１回は授業参観できるようにする。また、職員の自主研修会を活用して授業研究ができるように工夫する。
	教育検証プロジェクトのフィードバック（○研究研修推進）	○昨年度実施した教育検証プロジェクトより、①専門教科の４つの共通目標の継続指導、②コミュニケーション力の向上、③生徒の実態把握と適切な支援、④職員の専門性及び指導力の向上の視点で取り組む必要性があることがわかった。	○分掌の各部が連携して取り組み、職員の指導力及び専門性の向上を図り、生徒に働く意欲を培う。	○共通目標に視点を当てた授業公開を実施する。 ○自立活動の授業公開及びコミュニケーションに課題をあてた生徒への直接指導を実施する。 ○客観的な生徒の実態把握を実施する。 ○全職員での職員研修会を実施する。	○自立活動の個別での直接指導については年間を通して随時実施した。実態把握については学年部・進路部と連携して必要な生徒に対して実施できた。職員研修については計画していたものに関しては実施できた。また、多くの職員が参加し、アンケートの結果もおおむね良好であった。	B	○自立活動の個別の指導に関しては今後も学年で計画的に必要に応じて実施する。また、実態把握についても本校に必要なものを必要な生徒に活用できるようにさらに検討していく必要がある。また、職員研修についてはアンケートの結果や検証プロジェクトを基に来年度も実施する。
5　組織力向上	連携・協働による組織的な指導、支援（○総務部）	○生徒一人一人課題や環境は多様化し、効果的な支援や指導の在り方について、職員間の連携や協働が必要である。	○問題意識を高め、早期発見、早期対応、早期解決のための情報共有、連携ができている。	○生徒情報システム等の各種データベースの積極的活用による迅速な報告、連絡、相談による情報の共有化を推進する。 ○職員会議や朝礼等で報告、連絡、相談を行い、風通しの良い職場づくりに努める。	○生徒情報共有システム等のデータベースの積極的な活用により、問題の早期発見、早期対応、情報の共有を図ることができた。 ○朝礼や終礼等でできるだけ早く報告、連絡を行い、早期の段階で連携した対応ができた。	B	○生徒情報共有システム等のデータベースの積極的活用、報告、連絡、相談を継続することで、情報共有、連携に努める。
	教職員の対応力向上（○総務部）	○様々な事案に対し、対応力の向上が必要である。また、県内での不祥事が絶えない現状がある。教職員一人一人が常に問題意識を持ち、継続して研鑽を積むことで対応力の向上を図ることが必要である。	○学校全体の問題としての対応の仕方について共通理解を図ることができる。 ○コンプライアンスの意識を高める。	○対応力研修を実施する。 ○終礼等でのコンプライアンス研修や掲示物での啓発を行う。 ○琴の浦ルールブックの活用を推進する。	○対応力研修を実施した。 ○朝礼や終礼でコンプライアンスについて呼びかけを行い、注意喚起を図った。 ○長期休業中にコンプライアンス研修を実施した。 ○琴の浦ルールブックの見直しを行った。	B	○対応力研修や朝礼、終礼でのコンプライアンスの呼びかけを継続して実施する。 ○琴の浦ルールブックを印刷、配布し、活用を図る。

評価基準　A：十分達成〔100%〕　B：概ね達成〔80%程度〕　C：変化の兆し〔60%程度〕　D：まだ不十分〔40%程度〕　E：目標・方策の見直し〔30%以下〕